

うづくまる —— 石原吉郎の作品における河と時間

齊藤 毅

一、海を流れる河

石原吉郎の第一詩集『サンチョ・パンサの帰郷』（一九六三）のあとがきは次のようなくだりで終わっている。

条件のなかで人間として立つのではなく、直接に人間としてうづくまる場所。それが私にとってのシベリヤの意味であり、そのような場所でじかに自分自身と肩をふれあった記憶が、〈人間であった〉という、私にとってかけがえのない出来事の内容である。（I 543）¹⁾

「シベリヤの意味」とは、石原が一九四五年から五三年までシベリアに抑留された、その意味ということであろう。その意味は「直接に人間としてうづくまる場所」に凝縮されているのである。

ところで、当時の読者には知る由もなかったことであるが、このあとがきのくだりは、石原が抑留されていた時期の具体的な体験に根ざしており、彼は後年、その体験について繰り返し、より詳細に語っている。その最初のもの、『展望』一九七〇年九月号に掲載された散文《沈黙と失語》²⁾である。その該当箇所をあげよう。

一時間の労働のうち十分だけ与えられる休憩のあいだ、ほとんど身うごきもせず、河のほとりへうずくまるのが私の習慣となった。そしてそのようなとき私は、あるゆるやかなものの流れの中に全身を浸しているような自分を感じた。「……」私の生涯のすべては、その河のほとりで一時間ごとに十分ずつ、猿のようにすりこんでいた私自身の姿に要約される。のちになって私は、その河がアンガラ河の一支流であり、タイシエットの北方三十キロの地点であることを知った。原点。私にかんするかぎり、それはついに地理的な一点である。(Ⅱ 34、傍点引用者)

彼が「アンガラ河の一支流」の畔に座っていたのは、いつのことだったのか、ここを読むだけでは定かでないが、この散文が詩文集『日常への強制』(一九七〇)に収められた際、その直前に置かれた散文《オギーダ》(初出は『都市』一九七〇年第三号)に詳細が記されているので、この詩文集の読者ならば、右の記述に自然に入ってゆけることになる(この配列は一九七二年の散文集『望郷と海』でも踏襲されている)。《オギーダ》の該当箇所は次の通りである。

昭和二十五年春、私は、バム鉄道沿線の〈コロナ33〉と呼ばれる収容所から〈コロナ30〉へ移された。〈コロナ〉とはこの地帯での、強制収容所の一般的呼称であり、33という数字は、バム鉄道の起点であるタイシエットから三十三キロの地点を意味している。したがって〈コロナ33〉から〈コロナ30〉へ移動したことは、三キロだけ日本に近づいたことを意味する。(Ⅱ 19)

《オギーダ》ではこのコロナ30の作業現場を流れる「アンガラ河の支流の一つ」で起こった、ある出来事

が語られるのである。散文集『海を流れる河』（一九七四）の巻末に付された「自編年譜」によれば、石原は一九四九年四月、カラガンダの軍法会議臨時法廷で重労働二十五年の判決を受け、九月にシベリアのタイシエツトへ移送、そこからバム鉄道（バイカル・アムール鉄道の略称）を北上し、コロナ33に到着している。「爾後翌年九月までが、入ソ後最悪の一年となる」と「自編年譜」にはある。その「翌年」、一九五〇（昭和二十五）年の四月に石原らは「コロナ30」に移動し、労働に従事。「この間栄養失調がひどく入院二回」。同年九月にタイシエツトへ送還され、そこから極東のハバロフスクへ送られる。「車中ほとんど昏睡状態のまま」とやはり「自編年譜」にある（Ⅲ 514—515）。

バム鉄道沿線の収容所が、数あるソ連収容所の中でもきわめて条件の過酷なところであつたことはよく知られている。石原自身が帰国後、親族に宛てた手紙——一九五九年一〇月——の中で次のように述べている通りである。「ソ連の囚人たちの間では、隠語で〈屠殺場〉と呼ばれている最低の流刑地が二つあります。一つはカムチャツカの北西から北極海に到るコルイマ地帯、もう一つはバイカル湖の西側、アンガラ河に沿う無人の密林地帯で〈バム〉と呼ばれています。ここに送られることはその頃の囚人にとって最大の恐怖を意味しました」（Ⅱ 166）。こうして、石原が自身にとつての「シベリヤの意味」と言う「うずくまる」体験は、ソ連の「最低の流刑地」で、「入ソ後最悪の一年」の間になされたことになる。

このアンガラ河畔での体験について、『サンチョ・パンサの帰郷』のあとがきでは「うずくまる場所」と言われ、《沈黙と失語》では「原点。私にかんするかぎり、それはついに地理的な一点である」と言われていたが、後者の「地理的な一点」については、その意味するところを二つの散文、すなわち『海を流れる河』所収の表題作『海を流れる河』（初出の記載なし）、および『断念の海から』（一九七六）所収の『海への思想』（同書が初出）に即して解釈することができる。⁽⁵⁾これら散文でも「アンガラ河の一支流」での体験が綴られているのである

が、それぞれのタイトルからも窺えるように、そこでまず問題にされるのは海と河の関係である。《海を流れる河》は、冒頭に第三詩集『斧の思想』所収の詩《河》（一九六八）全文が引用された後、次のように書き出される。

河に出会う前に、私は海に出会った。「……」戎衣^{じゆい}をまとって海を渡ったのは一九四〇年夏、私が河を見たのは一九四八年の春から夏にかけてである。そののちもう一度私は海を渡った。そして私にとって、海は永久に終った。だが河は私に、今も持続している。（Ⅱ 250）

この文中、「一九四八年」とあるのは「一九五〇年」の誤記であろうが、「海を渡った」のが「一九四〇年」であるというのもまた事実とは異なる。この海は言うまでもなく日本海であるが、石原がハルビンの関東軍情報部に配属されたのは「一九四一年」の夏であり、それは同書巻末にある「自編年譜」で簡単に確認できる。なぜ石原はこのような明白な誤りを、繰り返し犯しているのだろうか。ともあれ、四五年、彼は日ソ中立条約を破棄して攻め込むソ連軍の捕虜となり、以降、石原にとって海は、故国への望郷と切り離せないものとなった。それは『望郷と海』の表題作《望郷と海》のタイトルにも端的に表れている通りである。《海への思想》の冒頭も引いてみよう。

戦後の一時期、海は私にとって二つの方位へかたくなに結びついた。私がしばしばたずんだ東シベリア、アングラ河の一支流の一点、その位置から思いえがいたのは、一つは北、一つは南の海である。

海へかかわった私の思考は、かかわったその位置において重大であり、「海へ」というひたすらな傾きを決定したからこそ〈位置〉であったといっている。位置を重大とする立場は、おそらくそのときに用意され

てあったのではないか。(II 422)

その少し先で「そして河は、海への予兆として私の前にあった」(II 422)と言われているのだが、この海と河の関わりについて問おうとするならば、地と水という境位^{エレメント}の対立について考えなければならない。海は人間の生の境位としての地の輪郭を画すものであり、そのため、みずからが今ある地と故国とを切り離すものともなりうる。しかし、人は故郷へ到るためには、まず海に到らねばならない。そうした中、とりわけ「東シベリアの密林^{タイガ}のただなか」(II 250)のようなところにあつては、地を流れる河は、確かに海が存在することの論理的な確証となるものである。なぜなら、有限の物質としての水が地の勾配に従つて流れているのが河であり、地なくして河もまたありえないのであれば、その河が無限に続く、すなわち河が流れている地が無限に続くということは論理的にありえず、必ずや地が終わる河の出口、すなわち海があるはずだからである。

実際、石原が出会つた河は、『海を流れる河』によれば「アンガラ河の一支流であり、やがてはエニセイ河に合流して北上し、北氷洋にまぎれるまでの道すじ」(II 250)であつた。このように河は水系^{システム}という「系」をなしているがゆえに、人がみずからの位置する「地理的な一点」を確認する手段ともなるのである。

しかし、問題なのは、石原自身は、河は終わらないと述べていることである。「河はついに、目指すところへは至らぬであろう。それが、河が流れることの意味である」(II 251)。無論、事実としては、河は海に合流するのである。「海よりもさらに海を流れる河」(II 251)というものを石原は想定し、そこにこそ河の「意味」を見るのである。これが『海を流れる河』というタイトルの意味であり、また詩篇『河』が語ることなのである。この詩篇をここでも全文引用しておこう (I 189-190)。

そこが河口

そこが河の終り

そこからが海となる

そのひとところを

たしかめてから

河はあふれて

それをこえた

のりこえて さらに

ゆたかな河床を生んだ

海へはついに

まぎれえない

ふたすじの意志で

岸をかぎり

海よりもさらにとおく

海よりもさらにゆるやかに

河は

海を流れつづけた

《海への思想》では、こうした海に到ってもなお流れ続ける河について、やや別様に次のように言われている。

私はアンガラ河——実際はその一支流であるが——は見ているが、アンガラ河を併せてさらに北上するエニセイ河は見えていない。そしてエニセイ河がついに流入して、河としてのすべての経過を終るはずの北氷洋は、そのときの私にも、今の私にもはや幻想というほかないものである。(Ⅱ 423)

ここで北氷洋が「幻想」であるのは、単に書き手がそれを見ていないからだけではない。《海を流れる河》、詩篇《河》と照らし合わせるなら、北氷洋は、河が「ついに流入して、河としてのすべての経過を終るはず」のところではなく、河はその先をさらに流れ続けるであろうがゆえに、その实在性が希薄になるということであろう。北氷洋の「幻想」性については、《海への思想》ではさらに次のようにも言われている。

私が南へ想いえがいた海とは、母国と私をへだてる海、いちど渡り終えてのち再び渡り終せるとは信じられぬ海、北へ想いえがいた海とは、南への断念が反射的に求めた、いわば幻想の海とであったといっている。(Ⅱ 422)

つまり、北の海としての北氷洋は、みずからと故国を隔てる南の海としての日本海を断念した反作用として求められたものであり、その意味でも「幻想」であったということである。そうすると、ここで問われるべき点は二つある。一つは、「海を流れる河」とはいかなる事態なのか、一つは、なぜその河は北を目指すのかということである。

二、うづくまる（一）…「条件」の放棄

まず、一つめの問いから考えてみたいが、それを解く鍵が、まさに冒頭からあげてきた「うづくまる」体験であるように思われる。というのも、河は実際には「私」との関係の中でしかありえないからであり、その「私」の河への関係が「うづくまる」という姿勢なのである。先に引いた《海を流れる河》の冒頭を、先は省略した箇所も含め、もう一度引いてみよう。

河に出会う前に、私は海に出会った。かずかずの海と河のなかで、私に出会ったのは、それぞれにひとつである。（Ⅱ 250）

ここで書き手は、海と河に「私は（……）出会った」と言い、さらに海と河が「私に出会った」と言う。河と海はここでは主体であり、私に対して二人称的な関係にある。もちろん石原吉郎自身は、いくつかの海と多くの河を見たであろうが、彼が「出会った」のは「それぞれにひとつ」、つまり日本海とアンガラ河の一流流だけだったのである。

『サンチヨ・パンサの帰郷』のあとがきでは「条件のなかで人間として立つのではなく、直接に人間としてうづくまる場所」とあった。ここに見られるのは「立つ／うづくまる」という姿勢の対立であり、それに対応する「条件のなかで人間として／直接に人間として」という限定の対立である。しかし、厳密に言うなら、「立つ」は姿勢であると同時に動作であり、動作としてそれに対立しているのは「座る」である。そして、「立つ」に対立する、その座っている姿勢を、ことさらに「うづくまる」と表現するのは、それが「立つ／座る」という動作の

対立自体を放棄する姿勢であることを強調するためであるように思われる。そして、その姿勢が「直接に人間として」と言われているのである。これについて、さらに詳しく見てみよう。

「立つ」という姿勢は、四足歩行の動物が、道具の使用のために前足を解放した結果、実現した二足歩行からくる。その意味で、ここには「人間（二足歩行）／動物（四足歩行）」の対立があるかのように見え、実際に、先に引いた《沈黙と失語》の一節では「猿のようにすわりこんでいた私自身の姿」とあった。これは「うずくまる」姿勢と猿が座る姿勢の類似を言っているだけでなく、猿の前足がまだ手とは未分化であることを暗示しているのではないか。

ここで思い出されるのは、石原の第二詩集『いちまいの上衣のうた』所収の詩《シベリヤのけもの》（一九六四）である。⁽⁸⁾この詩は「ついに他人の／意味となることのない／完璧な言葉を口ごもりながら」という三行の次に一行分の空白が置かれた後、引用符に括られた「（忘れるなシベリヤのけものには／毛深い腋が四隅あることを）」という二行で終わっている（132）。「毛深い腋」とは腋毛のこととまず考えられるが、これが「四隅ある」というのは、四肢がすべて「手」と捉えられているのだ。通常の「けもの」は付け根の「毛深い」四本の「足」を持つが、「シベリヤのけもの」、おそらくシベリアの四人は、四本の「手」をすべて地べたに付けた、つまり人間でありながら「立つ」ことを放棄した人間なのである。

「立つ」という姿勢は、それが二足歩行に由来することから、「歩く」という動作と切り離すことができない。そして、「歩く」という動作はそれ自体、空間の差異化——あるいは、世界の差異化による空間の出現——であると言える。まず、二足の直立姿勢をとった時点で上下、ないし天地の差異化がなされる。そして、歩く過程において前後が差異化され、その運動がなす線分の両側、すなわち左右も差異化される。こうして、歩くという動作により、最初に差異化された天地のうち、地の平面は十字形に差異化されることになる。この十字形が、二次

元の平面上の点を記述するその座標軸、そして、これまで引いてきた石原の散文でつねに問題にされていた東西南北の方角と相似的事であることは、言うまでもない。そして、詩集『サンチョ・パンサの帰郷』の冒頭に置かれた詩篇《位置》に見られるように、こうして差異化された空間が、例えば対面関係が対決を、横列関係が同質化を示すというように、人間の共同性をそのまま規定してゆくことになるのである。⁽⁹⁾

ここまで辿ってくれば、「人間として条件のなかに立つ」というときの「条件」の意味は明らかだろう。それは、空間の差異化のうちに象徴的に体现された人間の共同性のことである。そして、それを放棄する「うづくまる」姿勢は、動物性への回帰ではなく、「直接に人間として」と言われ、それが続く文の「じかに、自分自身と肩をふれあった」と呼応しているのである。つまり、この「自分自身と肩をふれあった」というのも、「人間として条件のなかに立つ」ことに対置されるあり方になる。人間の共同性は、まず対面性というものを基礎としている。この「対面性」という言い方には顔という契機も含意されているが、対面するときの相手の姿は、同時に自分の鏡像でもあり、人間は自分を相手と相同的なものとして、そして、相手を自分と相同的なものとして捉え、そこから相同的な個の関係としての共同性という觀念も生じるのである。⁽¹⁰⁾

それに対し「じかに自分自身と肩をふれあった」というのは、まったく異なる自己把握を示している。「肩をふれあった」というのは、対面的な関係においてではなく、ということであり、「じかに」というのは、対面する相手の映像を媒介としてではなく、ということである。そして、「ふれあった」というのは、自己を映像としてではなく、いわば物として捉えるということになる。これが「うづくまる」自分、つまり「条件のなかに立つ」ことを放棄した、もう一人の自分なのであり、そうした物としての自分が占めるのが「場所」なのである。

ここでの「場所」は、「人間として(の)条件」の関係性、その座標軸の中で相対的に決定される位置と区別しなければならない。これは、先に引いた《沈黙と失語》で言われていた「原点」と同じものと考えてよいと思

われる。その箇所を後続部分も含めて、再度掲げてみよう。

私の生涯のすべては、その河のほとりで一時間ごとに十分ずつ、猿のようにすわりこんでいた私自身の姿に要約される。のちになって私は、その河がアンガラ河の一支流であり、タイシェットの北方三十キロの地点であることを知った。原点。私にかんするかぎり、それはついに地理的な一点である。しかし、その原点があることによって、不意に私は存在しているのである。まったく唐突に。私はこの原点から、どんな未来も、結論も引き出すことを私に禁ずる。失語の果てに原点が存在したということ、それがすべてだからだ。(Ⅱ 34)

この「地理的な一点」が「原点」と呼ばれているのは、それが他との関係の中で相対的に決定される点ではないからである。これは、その気になれば「北緯何度、東経何度」というふうに厳密に測定できる具体的な(「地理的な」)一点であろうが、彼がそこにいることに彼の意志はまったく介在しておらず、彼は他と関係を持つことが不可能なまま、完全に受動的にその「場所」を占めているのだ。⁽¹⁾「失語の果てに原点が存在した」というのも、同じ事態を指しているだろう。この散文での「失語」とは、収容所内ですべてが「条件」と化し、言葉が有限のルールからなる言語ゲームと化し、「一人称と二人称はもはや不可能であり、そのいずれをも三人称で代表させることができる」(Ⅱ 33)、そのような状態だからである。

しかし、「その原点があることによって、不意に私は存在しているのである。まったく唐突に」。これが意味しているのは、存在とは存在者の自明な常態ではなく、ここで「原点」と言われているような場において、いわば顕れるのだということである。そして、この存在は時間とそのまま結びついている。石原がこの「うずくまる」体験を散文で物語るときに、繰り返し「一時間に十分」という背景を記していることを見逃すべきではない。と

いっても、「原点」に顕れる存在が、そうした計測的時間と関係するわけでは、もちろんない。むしろその存在は、計測的時間の観点からすれば「不意に」、「唐突に」という時間性のものでしか顕れない。それは時間的パースペクティヴには属さず、「この原点から、どんな未来も〔……〕引き出すこと」はできないのである。

この「うずくまる」時間性とはいかなるものなのか、それを見るためには、やはりそれに対置される「立つ」ということは「歩く」時間性を見ておく必要がある。まず、「歩く」という行為は主体の意志の現われであり、その意味で主体の自由の現われのように見えるのだが、『サンチョ・パンサの帰郷』あとがきの、ここで問題としている一節の直前の部分では、次のように言われている。

私にとって人間と自由とは、ただシベリヤにしか存在しない（もっと正確には、シベリヤの強制収容所にか存在しない）。日のあけくれがじかに、不条理である場所で、人間は初めて自由に未来を想いえがくことができるであろう。（I 543、傍点は原文）

「歩く」行為は「人間として〔の〕条件」（例えば、「日のあけくれ」という、時間的単位の反復）に規定されているわけだが、その「条件」が「不条理」にまで到るときがあり、むしろそのときにこそ「自由」は現れ出てくるのだと、ここでは言われているのである。

例えば、人が前方に歩いてゆくとき、その人は「条件」としての目的論的パースペクティヴの中にある。人には目的地があり、そこへ向かって歩いてゆくのだ。そのとき、歩く動作が描く線分は、そのまま線状化された時間を示しているように見えるが、実際にはそうではない。歩くという動作自体、ステップの反復であり、それは連続的ではなく、断続的である。そして、歩く行為の目的は、目的地へ着くことなのだから、そこで問題なのは、

ある点からある点への移動なのであり、そうした目的論的意志は速度を志向し始める。しかし、速度と言っても、問題は移動にかかる時間を可能な限りゼロに近づけることであり、それは実は時間の無化への志向なのである。

石原らが作業に従事していたバム鉄道の路線、中継収容所、^{ベレスールカ}バム鉄道の始点としてのタイシエツト、そこからの距離を示す「コロンナ33、30」という数字等々は、すべてそうした点から点への移動における時間の無化への志向を体現している。そして、その志向が極限へ向かうほど、それは「不条理」という様相を呈してくるのだ。こうして、「うずくまる」ことの「自由」とは、そうした「条件」の放棄であり、その中で「想いえがかれる」「未来」と言っても、それは時間の線的パースペクティヴに属さないものである。

三、うずくまる（二）…「現在」という時間

ここで我々は「うずくまる」時間性の手前にまで辿り着いたことになる。それは、「場所」とどまることで生じる時間と言える。それを《海を流れる河》に即して見てみたい。つまり、問題は河に回帰してくるのである。

だが河は私にとって何であつたろう。東シベリヤの密林の^{タイガ}ただなかで、そのとき私が見た河は、かならずしも流れるようにして流れてはいなかった。ロシヤの河は、多くはそうようにして流れる。（Ⅱ 250）

「流れるようにして流れてはいなかった」とは、眼を凝らして見なければ静止して見えるほどに緩慢な流れであつたことだろう。この地の勾配に沿った水の「流れ」のうちに、ある種の時間を見ることができ、それは物質の有する位置エネルギーがゼロへと向かう傾向であり、砂の山の「山」という^{フォルム}形態が、やはり物質の

同じ傾向によって崩壊してゆくのと同じである。いわば物質に内在する時間性であり、有機体においては死へ向かう傾向と言ってもよいだろう。それは「一時間に十分」という計測的時間はもちろんのこと、「歩く」という点から点への移動の線とも無縁であり、むしろ、そうした「流れ」のもとで人が「うずくまる」ことにより、次のような時間の外観が生じる。

私がたたずんだ地点から上流は、河の過去であり、下流は河の未来であり、たたずんだ私のはばだけが河の「現在」として、私の目の前にあった。そして私がたたずんでいるそのあいだも、河はつきからつきへと生まれかわるようにして、三つの時間帯を通過しつつあった。(Ⅱ 250)

ここでは「たたずむ」という言い方がなされているが、その先の部分では「かつて安堵した位置へ、もう一度安堵してうずくまることができるだろうか」(Ⅱ 252、傍点は引用者)と表現されている。ともあれ、注意すべきなのは、ここでは河の流れがそのまま時間ではなく、時間は河と「私」が「出会い」、「私」が「うずくまる」ときに生じるということである。

このくだりで「三つの時間帯」として区別される過去、現在、未来のうち、現在だけが括弧で括られているが、それはおそらく、ここでの未来、過去という言い方は類比にすぎず、真に実在しているのは「現在」だけだからと思われる。そして、この「現在」は《沈黙と失語》で「その原点があることによって、不意に私は存在しているのである」と言われるときの「存在」の別の様相であると言える。というのも、ここでの「現在」は「たたずんだ私のはば」に対応しており、その「はば」は「条件」を放棄した「私」が物として占める「場所」に当たるからである。そのような「場所」が《沈黙と失語》では「原点」と呼ばれていたのである。

誤解してはならないのは、「私」が物となると言うとき、「私」ないし石原の言う意味での「人間」が否定されているわけではないということである。そこではむしろ、人間の物質性が回復されているのだと考えるべきだろう。点から点へ移動する目的論的意志は、時間の無化を志向するが、それと同時に物質性の無化をも志向する。その物質性は移動の障害にしなければならないからである。点から点への移動に際し、移動する人間もまた点と化するのだと、比喩的に言うこともできる。この時間と物質性の無化への飽くなき追求が、人間の「条件」を「不条理」へと導いてゆくのである（石原に限らず、抑留経験者の方々の回想に見られる「囚人移送列車」^{ストレイベンカ}の描写を読めば、そこで人間が「点」としてしか扱われていないことが分かるだろう）。

同様のことが、「立つ」ことを放棄して地べたに「うずくまる」姿勢、また先に見た「シベリヤのけもの」の形象についても言える。これらは貶められた「人間」性を表現するものと考えるのが普通であり、実際、ソ連の収容所のようなところでは幾多の人びとがそのようにして貶められてきただろう。しかし、石原が「うずくまる」という表現に「じかに人間として」と付け加えるとき、そこには別のことが指し示されている。先に見たように、「立つ」姿勢において世界は天と地に差異化され、さらに「歩く」行為により地は十字形の座標軸へと空間化される。そのとき忘却されるのが、その不可人性によって「歩く」行為自体を成り立たせているはずの、地の物質性である。地の抽象化としての「歩く」行為は、地の物質性に支えられているのであり、「うずくまる」姿勢は、みずからを物と化すことにより、その物質性に身をゆだねることである。しかし、それは動物への回帰なのではなく、「シベリヤのけもの」のように、あくまで「人間として」四肢を「手」と化し、地べたに手をつけるのである。

こうして、「じかに人間としてうずくま」り、その「場所」で地に身をゆだね、やはり物質としての水に内在する時間性に、いわば同期した状態が、「現在」であり「存在」なのだと言うことができよう。河の流れは線状

性という見かけを有しているが、それは移動におけるような目的は持たず、その本性はとどまらないこと（「つぎからつぎへと生まれかわるように」、「未完了」ということである。移動ならば目的地に着いた時点で「完了」するのであるが、『海を流れる河』では「水源を去った河が私に出会った地点で完了せず、さらに流れてゆく」（Ⅱ 250）と述べられている。先の「三つの時間帯」に関するくだりに後続する部分も引用しよう。

音という音が扼殺されてしまったような静寂のただなかで、私をとりかこむ時間の、この不思議な感触を、いまだに私は忘れることができない。河は永遠の継続、永遠の未完了として私の前を、ひたすらに流れつづけた。

河はついに、目指すところへは至らぬであろう。それが河が流れることの意味である。（Ⅱ 251）

時間が「私をとりかこむ」、また時間の「感触」という表現に注意したい（さらに『サンチョ・パンサの帰郷』あとがきの「じかに」……）肩をふれあった」という表現との類縁にも）。この地と水の物質性から起こる時間は、線状的に流れ去るものではなく、「現在」として「私をとりかこむ」のだ。そして、この箇所で表題の『海を流れる河』という言葉の意味も明らかにされる。河の意味が「未完了」である以上、それは河口を超えてさらに流れ続けるということである。

ただし、それは海に流れた河が、雲、そして雨と化し、水源に戻るという自然界における水の循環を指しているのではない。「海を流れる河」という観念は、そうした循環を否定し、未完了であるはずの河の流れに、明確に始まりと終わりを措定しているのであり、ここにこの観念のさらなる特異性がある。『海を流れる河』では、思考が次のように進められている。

河は永劫に遠ざかり、海は永劫にその姿をくり返す。そのくり返しを二分して、遠のいて行くものの果てに、あるいは終末のようなものを予感していたのかもしれない。

もしついに海に注ぎ入ることが、逃れがたく河の宿命であるならば、北氷洋の、そのさらに向こうのひろごりに注ぐのでなければならぬ。それはいわば、巨きな安堵の海である。死者の海。その海をそう名づけてもいい。

その時期の私は、存在の放棄の果てに安堵のような死を見ていたのかもしれない。その安堵は今はない。河は私の衰弱をこえ、そのものとなつて北へ流れた。(II 251-252、傍点は原文)

「海は永劫にその姿をくり返す」とあるように、自然は物理的には循環を繰り返す。河も海と一体で循環系をなしている以上、その流れは繰り返されるのだが、「海を流れる河」という観念の導入により、あたかも位置エネルギーのような潜勢的エネルギーの一切が現勢化され、ゼロとなるような契機、「終末」が想定されることになる(ただし、石原は「予感」としか書いていないが)。

この「終末」という語は、その通常の用法からして、明らかに宗教的な意味、すなわち世界の歴史的時間を超出したもののという意味を有している。それは「死者の海」と呼んでもよいが、むしろ河が裸形の物質と化し、「そのもの」、すなわち「もの」としか呼びようのないものとなる地点と言える。

四、水準原点

これまで見てきたように、石原はそうした「終末」の海をつねに北に位置づけ、それを南の海、すなわち日本

海の断念からくる反作用として説明していた。確かにそうなのだろうが、さらに北（極）には南（極）と異なり、人間の生の境位としての地（大陸）がないこと、そして何よりも北は地上のどこにあっても磁石コンパスにより指し示すことができるという点で、地上のあらゆる存在者が向かう「終末」の方向としてふさわしかったということもあるのではないだろうか。あるいは、北極圏には極夜の現象があり、そのときそこは「夜／昼」という「条件」としての時間の分節が行われない空間になる、といったことも関連しているのかもしれない。いずれにしろ、石原における「北」は完全なる観念（ないし「幻想」）なのであるが、なぜそのような観念が必要とされたのか、その鍵が右に引いた《海を流れる河》のくだりの最後の段落にあるように思われる。

そこには「存在の放棄の果てに安堵のような死を見ていた」とあるが、ここでの「存在」は本論で言う「条件」のことであり、同散文で括弧付きで「現在」と呼ばれているものの別名としての「存在」ではないだろう。つまり、その「放棄」は「うずくまる」姿勢に体现されているものであるが、それは「衰弱」の結果であり、そのために地の物質性に身がゆだねられるのである。「衰弱」自体、肉体の物質性の顕れ以外の何ものでもない。そして、この段落は、その「衰弱」の果てに「終末」の海があると言うのである。

まったく同じ言及は《海への思想》にも見られる。「……原点を北に求め、その原点からさらに北へさかのぼろうとするとき、もはや幻想の領域でのそのひたすらな北上は、つねに深い疲労に結びついて行く」（Ⅱ423）。苦痛が肉体の物質性の突発的な予兆であるとしたら、その全面的顕れとしての疲労は「むしろ救いとして、休息としてやってくる」（Ⅱ423）。その観点から《海への思想》では「うずくまる」体験が次のように語られる。

一時間に十分ずつ、作業現場で許される休憩のほとんどを、私は河のほとりへ座ったまま無言ですごした。その時の私には、疎外されているという感覚はほとんどなく、むしろある充実へ膚接しているような奇妙な

感覚があった。充実とは、おそらく生命と死の混在と運動のようなものであったのかもしれない。そのとき私が膚接しようとしていたものは死のはじまりではなく、あるいは生命の端緒であったのかもしれない。いわば完結したひとつの円環へ引きこまれつつあったのではないか。(Ⅱ 424)

「ある充実へ膚接しているような奇妙な感覚」は、『海を流れる河』の「私をとりかこむ時間(すなわち、現在、そして存在——引用者)の、この不思議な感触」と対応している。「疲労」において「条件」を放棄し、「うずくまり」つつ死への勾配に身を置く人間は、しかし、「条件のなかで(……)立つ」人間がそこからは疎外されている物質性の「現在」、「存在」に触れているのである。それは「条件」の中で営まれる人間的生とも、有機体の生とも異なるが、それらを等しく支えている物質的生なのである。

『海を流れる河』の最終段落には次のようにある。「河と共に、河を流れた思考は、いわば衰弱の論理、衰弱のリアリティである」(Ⅱ 252)。「衰弱」は「リアリティ」、つまり実在であると同時に、「論理」でなければならぬのだ。続く文はこうである。「その衰弱の故に、私は生命でありえたとし、予見でありえたと思う」(Ⅱ 252)。「衰弱」が即「生命」であるのは、今見たばかりであるが、そうであるためには、「今ここ」での体験を超出した「予見」、観念が必要とされるのである。

こうして、石原にとって収容所におけるあからさまに直接的な体験を語るにあたり、「海を流れる河」、「幻想」としての「北」、「終末」の海といった純然たる観念が必要とされた。「生命」と言うとき、例えば、常識的観点からは、自然の循環的な営みの中にそれを見えるというようなことが行なわれるが(そして、それは学的観点からも妥当である)、石原においてはまったく事実には即さない観念が持ち出されるのである。そのため、『海への思想』では、みずからの「北」への志向に関して、次のようなやや突飛な連想が語られる。「四年ほど前(一九七一

年頃——引用者」、たまたま立ち寄った国会前庭の一角に、日本水準原点標があきらかに北面して立つさまを見たとき、私は絶句し、そして感動した」(II 423)。

水準原点とは水準測量を行なうときの高さの基準点であるから、《海への思想》での河と海をめぐる思索と関わりはないかに見える。しかし、この水準原点標を目にしたときの驚きが、第四詩集『水準原点』(一九七二)の表題作《水準原点》(一九七二)執筆の動機となったのは間違いないだろう。そして、実はこの詩のいわば前史をなすと言える詩が存在するのだが、それは詩集『斧の思想』所収で、《海を流れる河》冒頭で全文が引用されていた《河》の直後に置かれている《落差》(一九六八)である。その全体を掲げてみよう(I 191-192)。

このゆるやかな

河の勾配を

落差が垂直に

引きなおすと

銃床から銃口へ

到る高さとなる

ある年の五月の

かがやく真昼

その垂直な高さへ賭けて

河ははるかに

行手をおしとどめた

北をもとめて

逆流するために

逆流して 河の

理由をさかのぼるために

さかのぼって 河の

みなもとを問いたです

ために

銃口へ到る意志の高さへ

河はゆるやかに その

流れをとめた

この詩は、河の勾配を垂直の落差として置き直すと、「銃床から銃口へ到る／高さ」(すなわち、警備兵が銃を掴み、銃口を上にして地に立てているときの形)になるという発想から出発している。⁽¹³⁾そして、「銃口へ到る意志」により河は「北」へ逆流を始め、その「みなもと」に到り、流れを止めるのである。《河》では、河が海に合流してもなお流れ続け、《海を流れる河》では、その河は「北」を目指した果ての、海に向こうの「ひろごり」に到るとされる(おそらくは、そこで流れを止める)。このように、一方は河口のさらに向こうの「ひろごり」で、一方は逆流した果ての「みなもと」で、河は流れを止めるというふうに、対偶的な関係にありながら、いずれも河は「北」を目指す。その「ひろごり」も「みなもと」も、現実にはありえない観念なのであり、その観念の場所が「北」なのである。こうして、「北」は他の三方との関係のうちにある相対的な方向ではなく、絶対的

な方角になっているのだと言える。

詩篇《水準原点》も、右のような石原的観念の系列に属し、《落差》と主題を同じくする一変奏と捉えられる。次がその全文である（I 250。行番号は引用者による）。

- 1 みなもとにあつて 水は
- 2 まさにそのかたちに集約する
- 3 そのかたちにあつて
- 4 まさに物質をただすために
- 5 水であるすべてを
- 6 その位置へ集約するまぎれもない
- 7 高さで そこが
- 8 あるならば
- 9 みなもとはふたたび
- 10 北へ求めねばならぬ

11 北方水準原点

まず、最後の三行から見てみよう。9-10行に見られるのは「ふたたび」という反復のモチーフである。それは「ふたたび」という音的要素にも見られるし、「みなもと」と「求めねば」は同語根の反復である。そうする

と、「兩行の冒頭にも、やはり反復の要素を認められるように思われる。「みな」という平仮名の背後にある「水」という漢字と「北」という漢字の形態的反復である。一方で「ふたたび」という語は、水の流れを遡り、再度「みなもと」に到るといって、『落差』と同じ主題の現れでもある。

そして、一行空白の後、「北方水準原点」という漢字六文字からなる最終行がくる。まず、ここに「北」と「水」の二文字が含まれることに注意したい。また、先に述べた通り、確かに「水準原点」という用語は、石原の観念系列と直接交わらないように見えるのだが、「水準」という言葉は、本来は地の勾配に従う水の流動性を利用した地の高さの測定器具を指し、さんずいを含む「準」という文字自体、元々はその器具を表すことから、実際には石原の河をめぐる思索に関わってくる。少なくとも「水準」という二文字には「水」が表れており、そこで次の文字「原」にさんずいを付せば、「源」の文字になる。つまり、この「原点」とは、水が地の勾配に沿って流れる、その「みなもと」を表しているのであり、それは「北方」、つまり「北」に方向づけられていることになる。

こうして、詩の最終行と、冒頭行の「みなもと」が一致する。そこで、今度は第1行から考えてみたいが、まず「みなもと」というものが存在するのかが問題である。すでに確認した通り、河という地形の始まりとしての源流は存在するにしても、実際にはそれは海、大気中の水蒸気、河という循環系の一点なのであり、「みなもと」は比喩的な言い方にすぎない。しかし、この詩では絶対的な始点というものを想定している。本来はその流動性のために形態^{フォルム}を持たないはずの水が、その「みなもと」、つまり循環的な流れの一点ではなく、絶対的な始点に「集約」されるために、ある「かたち」をとることになる。

その始点は、第6-7行にあるように、同時に一つの「位置」であり「高さ」である（第7行の「そこ」は「みなもと」を指す）。つまり、ここでも水は「物質」（第4行）として有する位置エネルギーを現勢化させなが

ら流れてゆくのであり、「集約」された水の「かたち」は拡散してゆくのである（「そのかたち」〔第2、3行〕、「その位置」〔第6行〕という指示子の反復に注意したい）。3、4行の「かたち」と「物質」は、アリストテレス哲学における「形相」^{（フィグマ）}と「質料」^{（ヒュレ）}に対応するとも言えるが、ここでの「かたち」は文字通り觀念上のものであり、一瞬後には水の「物質」性のゆえに突き破られてしまうものである。しかし、だからこそ「かたち」は一瞬の力の均衡のうちに成り立つものとして、いわば「物質」の生命の現れなのである。「そのかたちにあつて／まさに物質をただすために」とは、そのような意味であらう（ここでの「ただす」は「糺す」の意のはずである）^{（14）}。

こうして、水の流れ、その流動性は、始点に想定される「かたち」とのせめぎ合いの中で生命を得ていると言える。この詩では水の流れについては一言も語られていないのだが、《落差》との関係を考えるなら、この詩が流れの始原の追求（「求め」〔第10行〕）であることが分かる（《落差》には「河の／みなもとを問いた、だす／ために」とある）。第7行で「高さ」と呼ばれているその「みなもと」は、結局、「水である、すべてを／（……）集約する」と言われる。つまり、第1行で「みなもとにあつて」、第3行で「そのかたちにあつて」ともあるように、「みなもと」で問われているのは、水の存在なのであるが、それは単に「水がある」ということではなく、「水が水である」ということであり、河の流れを前に「うずくまる」私が「感触」する「現在」としての「存在」であるだろう。

そして、共に「北」の文字で始まる最後の二行で、その「みなもと」が「北に求めねばならぬ」と断言される。平仮名の「みなもと」から、象形文字であり、かつほとんど異国語的な響きを持つ「北方水準原点」^{（15）}への移行は、それ自体で水の「かたち」の「集約」を象徴的な形で示しているようにも見える。なぜ「北」であるのかは、この詩の中では謎のままであるが、これまで論じてきた、石原におけるもう一つの「北」、すなわち「海を流れる河」が到り着く「ひろごり」を鑑みるなら、《水準原点》における「北」もまた、やはり觀念の場であるのだと

捉えるべきである。「北」という文字が「水」という文字を左右に分割し、そこに空虚を介入させているかのように見えるのも、そうしたことと関係しているのかもしれない。

北極点が実際に地球上の一点として確かに存在しているにしても、すでに見た通り、そこは人間の生が営まれる場ではなく、「北」は実質的に方角、方向性としてしか機能しないということも、そこが観念の場として措定される理由でもあるだろう。石原は「うずくまる」という、みずからのきわめて具体的で直接的な体験の意味を求めるとき、河口の向こうの「ひろごり」、そして河の「みなもと」というヴェクトルの相反する観念を必要とし、それを「北」と名づけた。そして、それが今度はアンガラ河、エニセイ河、北氷洋という水系に投影されることで、日本海との関係と共に地理的具体性を獲得し、「うずくまる場所」は「地理的な一点」として確定される。こうして、世界はいわば詩的に構成されてゆくのだが、それが「立ち」かつ、「うずくまる」人間による世界の基本的なあり方なのだ。つまり、「うずくまる」姿勢が「立つ」こととの関係の中でしかありえないにしても、「条件のなかで人間として立つ」だけの人間には、世界は顕れてこないのである。⁽¹⁶⁾

注

- (1) 石原の作品からの引用は以下から行ない、巻数と頁数を括弧内に示す。『石原吉郎全集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』、花神社、一九七九、八〇、八〇年。
- (2) 石原は自分の散文作品について「エッセイ」、「評論」、「散文」と様々な呼び方をしているが、彼の散文作品は芸術的テクストとしての読解が不可欠との観点から、ここでは「散文」と呼ぶことにする。また、ここでは詩集、散文集のタイトルを『』、詩篇、散文のタイトルを《》で示す。
- (3) 『サンチョ・パンサの帰郷』所収の二つの詩篇、『デメトリアーデは死んだが』と『脱走』には「一九五〇年ザバイカルの徒刑地で」という副題が付されているが、これも「最悪の一年」、「最低の流刑地」にあたる。「ザバイカルの徒刑地」という表現

については以下を参照。齊藤毅「石原吉郎の詩における他者のトボロジー」、岩野卓司編『他者のトボロジー 人文諸学と他者論の現在』、書肆心水、二〇一四年、二七三―二七四頁。

(4)

本文中の引用での傍点は、すべて引用者による。

(5)

石原の死後刊行された散文集『一期一会の海』（一九七八）には一九七五年に行なわれたいくつかのインタビューも収められているが、そのうちの「二つの海」は『海への思想』と内容がほとんど重複しており、この散文の「下書き」として位置づけることができる。

(6)

散文『望郷と海』は、冒頭に第二詩集『いちまいの上衣のうた』所収の詩『陸軟風』全文が置かれ、かつ散文集『望郷と海』の表題作となつていっているという点で、散文『海を流れる河』とパラレルをなしている。

(7)

『サンチョ・パンサの帰郷』には『条件』と題した詩が収められているが、この詩と同詩集あとがきとの関連については、齊藤毅「石原吉郎の詩における他者のトボロジー」、二六二頁を参照。

(8)

この詩は『いちまいの上衣のうた』では『陸軟風』の直前に置かれている。註6で述べた通り、『陸軟風』は散文『望郷と海』の冒頭で全文が掲げられているが、散文の本文は、一九四九年に石原がカラガンタの軍事法廷で重労働二十五年の判決を受けた際のことを物語るものであり、そこには「私がそのときもつとも恐れたのは、『忘れられる』ことであつた」（Ⅱ197）とある。『シベリヤのけもの』には「われらはその日／実感として忘れ去られた」（Ⅰ132）という行があり、この詩と『陸軟風』は密接に関わりあっているものと思われる。いずれの詩も初出は一九六四年である。

(9)

詩篇『位置』と石原における「位置」の観念については、齊藤毅「石原吉郎の詩における他者のトボロジー」（とくに「うずくまる」との関連は二六五―二六六頁）を参照。石原は『一期一会の海』所収のインタビュー（註5参照）『位置』について「ただ『位置』という言葉が、どこから出て来たのかを考えると、結局アンガラ河のほとりにはんやりとしてうずくまっていた位置が、自分にとって原点に近い位置だということからだと思います」と述べている（Ⅱ572、傍点は原文）。

(10)

こうした相同的な個の発生、および石原の創作におけるその意義については、齊藤毅「石原吉郎の詩における他者のトボロジー」とくに二五七―二五八頁を参照。

(11)

別様に言うなら、人間はどこにしよう、そのような「場所」をみずからと共に運び続けるということでもある。石原の詩集『水準原点』所収の詩『墓』（一九七一）には次のようにある。「かぎりなく／はこびつづけてきた／位置のようなものを／ふかい吐息のように／そこへおろした／石が 当然／置かれねばならぬ」（Ⅰ263）。墓とはそのような人間の「位置」そのものである。

(12) 石原自身が挙げているバム、コルイマと共に、旧ソ連の過酷な収容所として知られているのが、北極圏のヴォルクタである。石原はそうしたことを聞き知っていたものと思われる。

(13) この河と銃の形象の結びつきには、前述の散文《オギーダ》で語られているエピソードが関連しているのかもしれない。一九五〇年六月中旬（「五月」ではない）、問題のアンガラ河支流をボートで横断して逃亡を企てた者の後を泳いで追うよう、石原は警備兵の軽率な判断により命令され、泳ぎ始めたところ、下士官オギーダにより背後から銃で撃たれる（弾は当たらなかった）という出来事があった。ちなみに、詩集《斧の思想》での詩の配列は、《河》、《落差》、表題作《斧の思想》、《北冥》、《一九五〇年十月十五日》……となっている。最後の詩の末尾は「一九五〇年十月十五日／河はゆるやかに流れた／一九五〇年十月十五日／男は銃床を地におろした」である（I 196）。

(14) 『二期一会の海』所収の《断念と詩》（一九七七）で石原は、立原道造の東京大学建築学科での卒業設計が「廃墟となることを予想した建築物の設計」であったことに触れた後、次のように述べている。「……もう何年か前に偶然の機会にアンコール・ワットの遺跡を訪れたことがあります。アンコール・ワットの遺跡は全体が砂岩性の軟質の岩塊の巨大な積み上げから成っていて、それがわずかずつ、日に日に風化し、崩壊しつつあるさまをはつきりと感じた時の、一種異様な感動をいまでも覚えております。（……）モニュメントとしての生命を断念したものが、なお崩壊しつつけることによって動きつづけていた。『生きつづけて』いたという不思議な感動は、断念という場にたどりついた現在の私にとって、かろうじて理解することができるようにあります」（II 535）。石原がアンコール・ワットを訪れたのは、一九六四年のカンボジア出張の際である。

(15) この六文字は、「北」が促音を含み、「方」、「水」が二重母音、「準」、「原」、「点」が撥音を含むため、すべての文字が一拍で発音されることになる。

(16) 石原は『二期一会の海』所収の一九七五年のインタビュー「新しい人間」において次のように述べている。「ロマ書にあるように、新しい人間にならなければだめだという発想が、厳としてあつて（……）それをずつと遡ると、子供の時からそうだったのです。（……）それが聖書の言葉につながり、ドストエフスキーにつながっていったのだと思います」（II 606）。『罪と罰』のラスコーリニコフが、『人間は一体何を一番恐れているんだろう、新しいことだ』と言うのは殺人をやる直前です。それから、彼が少しずつ新しい人間になっていくのは、シベリア以降です」（II 607）。本論で論じた「うずくまる」をめぐる石原の観念系列と、このドストエフスキーの小説『罪と罰』は多くの点で呼応しており、石原はみずからのシベリア体験とラスコーリニコフのそれとを重ね合わせているふしもある。石原が引いているラスコーリニコフの台詞は小説冒頭、第一部一章にあるが、実際は「新しいこと」ではなく、「新しい一歩、新しい自分自身の言葉」（傍点は引用者）である。石原はこれを一九五七

年四月五日のノートで正確に引用しているが(Ⅱ04)、これは小説のタイトルの「罪」がロシア語では「преступление」で「踏み越える」ことを意味しているのに対応している(法を「踏み越える」こと、また、殺す老婆の部屋の敷居を「踏み越える」こと)。そして、この台詞を呟くとき、主人公は殺人の予行演習として、老婆の部屋がある建物までの歩数を数えているのである。こうして、すべては断続的なステップとしての「歩く」ことに関わっている。さらに、ラスコーリニコフが殺人を執行した際の兇器は斧であったが、石原の作品においては、収容所の労働で用いられた「斧」の形象が重要な役割を果たしている(斎藤毅「兇器の時——石原吉郎の詩における斧の形象について」、『マテシス・ウニウエルサリス』、第二十卷第二号、二〇一九年を参照)。その後、ラスコーリニコフの罪の告白を聞いたソーニャが彼に命じたのが、よく知られるように「十字路に立ち、おじぎをして、地に接吻をする」ことであった(第五部四章)。この「十字路」は「歩く」行為により差異化される平面を象徴しており、そこで地に接吻することは、石原の言う「うづくまる」姿勢と同じ意義を担うことになる。最終的に主人公は自首し、シベリアの徒刑地に送られるが、ソーニャも彼についてやってくる。小説のエピローグの末尾で、ラスコーリニコフはイルトウイシ河のほとりの丸太に腰かけ、河を眺めているのだが、やがて隣にソーニャが座り、しばらくすると何かに捉えられたようにラスコーリニコフはソーニャの足へ身を投げ出すのだった。こうして終わる小説末尾のくだりを、石原は一九五六年のノートに〈新しい人間〉に関する七月三十一日の記述に続いて書き写している。「しかしここにはもう、新しい物語が始まっている。ひとりの人間が一步一步新しくなっていく物語が……」(Ⅱ86―87)。こうした『罪と罰』の主題構成と、石原の創作全体との照応関係は、詳細な検討に値するように思われる。

«Удзукумару»

— образ реки и понятие времени в творчестве Йосиро Исихары

Такэси САЙТО

Японский поэт Йосиро Исихара (1915-77) в своих прозаических произведениях повторно вспоминает одно и то же испытание в советском лагере, в котором он был заключен как военнопленный в послевоенные годы: во время десятиминутного перерыва на лагерной работе он всегда «ёжась, сидел» — «удзукумару», по-японски — перед течением реки (притока реки Ангара). Тогда, пишет Исихара, его «окружало» и даже «косалось» время «настоящее».

При описании этого испытания поэт противопоставляет положение «удзукумару» положению «стояния в человеческих условиях». Стояние (и хождение) человека само по себе представляет различие пространства на верх/низ (небо/землю), впереди/позади и справа/слева, и отсюда возникает и понятия линейного времени, сконструированного на основе пространственных взаимоотношений. В то время как положение «удзукумару» символизирует покидание таких «человеческих условий» и отдачу себя материальности земли и воды. Отсюда и вышесказанное непосредственное ощущение «настоящего», как времени, имманентного материи.

Основываясь на этом испытании, Исихара в своих стихотворениях создает два весьма своеобразных образа: образ «реки, текущей в море», которая в конце концов достигает эсхатологического пространства, и образ «истока» («минамото», по-японски), в котором вода стущается в свою цельность и предстаёт в своей единственности.

